

このコーナーでは、連携組織の活性化に意欲的に取り組む県内の組合事例等をご紹介します！

事業の概要

補助事業名	平成24年度連携組織活性化研究会			
対象組合等	富士見商店街（協）			
	▼組合データ			
	理事長	藤間 健史	住所	千葉市中央区富士見 2-8-5
	設立	平成 17 年	業種	卸売・小売業
	会員	62人		
テーマ	富士見商店街活性化のための今後の事業展開について ～商店街が実施するイベントの検討～			
担当部署	千葉県中小企業団体中央会 商業連携支援部 (Tel 043-306-3284)			
専門家	Drops 主宰 西田 直海 (千葉大学 非常勤講師)			

背景と目的

千葉市の中心市街地

JR千葉駅一帯から県庁周辺に広がる市街地は、明治のはじめに、県庁が千葉町に置かれ、県内の政治・経済・文化の中心地、また交通の要衝として発展した。

昭和二十年の空襲により、中心市街地の約7割を焼失したが、戦災復興事業によりいち早く、区画整理事業等が行われている。

周辺には、千葉県庁や千葉県警察本部をはじめとする、行政機関が集中するとともに、百貨店や商店街、金融・保険関係機関などの多くの集積があり、多くの投資が行われてきた。さらに近年では千葉市美術館、さぼーる（子供交流ビジネス支援センター）などが入る複合施設）といった、文化施設が建設されている。

富士見商店街の特徴

この中心市街地でもっとも千葉駅に近い商店街が、富士見商店街である。商店街の中心である富士見本通りは、全長約二百七十mの直線道路で、一方通行の国道である。この通りは、千葉の中心市街

地の中でも人の通りは多く、朝夕の通勤・通学の時間帯には多くの人が行きかう光景が見られる。

商店街全体として、テナントの入れ替わりは激しいが、一階部分での空き店舗はほとんど見られない。店舗の特徴としては、各種携帯ショップ、宝石やアクセサリー、ファッション衣料（古着も含む）、飲食などが多く、全体の三分の一は、チェーン店が占めている。

組合に加入しているのは、昔からの商店が多く、会員数は45、賛助会員は9となっている。

周辺では、スナックやクラブなど夜の店が増加し、客引きなどが横行し、環境は必ずしも良好とはいえない。そこで、警察とも連携し、「富士見サーティベル活動」など、地域の美化や防犯活動に積極的な取り組みがなされている。

事業の活動内容

ふるさと祭り参加への経緯

中央区のふるさと祭りは、千葉市の中央公園及び近隣商店街で毎年十月に開催され、21回（二〇一三年、この年は悪天候のため中止）を数える。

富士見商店街が、この祭りに参加を決断したのは、三年前（二〇一一年）となる。それまでは、栄町通り、千葉銀座通りを通行止めにし、それぞれ、楽市バザール&のみの市（栄町通り）、いい街ちばフリーマーケット（千葉銀座通り）が、ふるさと祭りと同時に開催されていた。

富士見本通りでも、以前からの通りを定期的に通行止めにし、来街者に富士見商店街としてのアピールを考えたいという議論がなされていた。

ここで、通行止めに関する懸案事項として、

- (一) 国道（国道14号・千葉街道）で あること
- (二) 駐車場の営業者との兼ね合い
- (三) 通行止めにかかる警備員の費用等が挙げられていた。

二〇一一年、中央区役所、中央警察とのトップダウンで、ふるさと祭りでの通行止めが可能になるとの話が舞い込んだ。

商店街としても、この機会を逃さず、次へつながるきっかけとしてとらえ、ふるさと祭りへの参加が決定された。

ハロウィンへの取り組み

ハロウィンは、毎年十月三十一日に行われる、ヨーロッパを発祥とする祭り。もともとは秋の収穫を祝い、祖先の霊とともにやってくる魔女や悪霊を追い出す、日本のお盆のような意味合いがある行事だ。近年は、欧米でも子どもたちの祭りとして親しまれている。特に、カボチャの身をくりぬいた「ジャック・オーランタン」づくりや、子どもたちが仮装して、お菓子をもらおうという風習は、日本にも受け入れられ、十月のイベントとして、広く定着した感がある。

ちょうど、時期も十月、普段は若者や大人が多い通りだが、明るく楽しい演出をして、親子連れに



も親んでもらえるよう、富士見本通りを、ハロウィン通りにすることとなった。

空間の演出は、歩道のボラードを利用し、二百体のジャック・オーランタンを取り付け、ハロウィンを盛り上げる。

通りの三か所に、ジャズやポップスやハワイアン、大道芸や紙芝居などの披露できる場を用意した。

ハロウィンにちなんだタトゥー（水シール）を無料で腕や顔に貼るサービスや、キャンデーの配布。

巨大かぼちゃの重量当てコーナー、カボチャのランタンの手作り教室、富士見ウォンテッド（スタンプリリー）、そして、メインは仮装コンテスト。



パフォーマンスはそれぞれのグループにお願いしたが、その他の企画から準備、実施に至るまで、商店街の関係者と、周辺大学の学生との協同で行った。

今後の事業展開・展望

今後の課題と展望

この事業は、商店街のソフト事業として位置づけられるが、膨大な準備時間を要しても、一日限りのイベントとなってしまうのが現状である。

少なくとも、ハロウィンに絡めて十月の一カ月は、雰囲気盛り上げるような様々な工夫をし、来街者を促し、商店は、商品開発や新たなサービスを尽力するという好循環を促してこそ、ソフト事業と言える。しかし、通行止めの時間は限られ、通りの装飾も通行止めの解除と同時に撤去しなければならぬ。道路は車中心に物事が決められ、装飾さえも規制の対象となる。

ハロウィンの通行止めを契機に、定期的な通行止めを望みたいが、そのたびに専門の警備員を置かなければならないなど、まず、予算の問題が浮上する。

これからは、もつと大局的な発想がいるのではないだろうか。たとえば、富士見本通りを、歩行者専用空間または、広場とする。この広場全体のマネジメントをする事務局を置き、専従の人を雇う。そして、季節や行事ごと、極論すれば時間ごとに、まずは通過する人のニーズを探し出し、集客を促す仕組みを作り上げていく。そのことによって、各商店は自らの商売の適進に集中することが出来る。

その循環を作り出すためには、周辺すべての商店や事業所（CSRの一環として）は共同体としての運営費を負担する。商店組合は、本来の目的である、商店街内の交流を促し、協力体制を整える。

他にも、志のある若者が創業できる仕組みを整え、商店街に新たな流れをつくるなど、構造的な改革に、知恵を絞り、汗をかくことが必要であろう。

いずれにせよ、正解があるわけではない。

模索しながら懸命に働く大人の背中を見なければ、商店街へ。商店街とは、そういうところであってほしい。

(西田 直海)